

第16回 千里浜再生プロジェクト委員会 会議概要

1. 日 時：令和6年2月9日（金）

2. 場 所：書面開催

3. 議事

1)千里浜再生プロジェクト委員会 検討資料【資料－3】

- (1) これまでの経緯
- (2) 昨年度（令和4年度）の陸上養浜の結果
- (3) 今年度（令和5年度）の陸上養浜状況報告
- (4) 令和5年度の海上採取・投入の結果
- (5) 陸上採取箇所の検討
- (6) 養浜量の試算
- (7) 海岸保全の意識向上のための取組み（ソフト施策）
- (8) まとめ

2)議事録及び資料公開の可否について

- ・ 書面にて各委員へ議事概要及び資料公開の確認を行い、了承を得た。

第16回 千里浜再生プロジェクト委員会 議事概要

各委員からの主な質疑・意見

(1) これまでの経緯（資料 P3～10）

- ・ 全体的に前進では無く、令和元年から前進が顕著になったと考えられないか。
→(事務局)令和元年からだ期間がやや短く、短期的には波浪の違いによる影響を受けるため「顕著な傾向」とは言えないと考えている。
- ・ 国土地理院による電子基準点の測量によると、令和6年能登半島地震の前後で羽咋市周辺では3cm程度の沈降が観測されている。この量は21世紀末までに予想されている平均海面水位の上昇量の1割弱に相当し、千里浜のような緩勾配の海岸では、砂浜幅への地盤沈降の影響が砂浜幅に現れる可能性があるため、砂浜幅のモニタリングにおいて注意する必要がある。
→(事務局)地盤変動を踏まえ、測量水準点の変動にも留意してモニタリングを実施する。

(2) 昨年度（令和4年度）の陸上養浜の結果（資料 P11～13）

- ・ 過去に被災のあった出浜、柳瀬口付近の現在の状況はどうなっているか。
→(事務局)目視では出浜、柳瀬口付近は昨年よりも侵食が進んだ様子は見られない状況である。詳細については、3月末予定の汀線測量をもって判断したいと考えている。

(3) 今年度（令和5年度）の陸上養浜状況報告（資料 P14～17）

- ・ 令和5年の陸上養浜の効果は、いつ頃判明するのか。
→(事務局)陸上養浜で投入した砂は投入後すぐ砂浜に寄与していると考えている。効果を確認するには3月の定期測量の結果を確認することが可能であるが、今年度は津波や冬季風浪によって砂が流出しているため、明確な効果を示す判断が難しいと考えている。

(4) 令和5年度の海上採取・投入の結果（資料 P18～26）

- ・ 令和5年度の測量結果および令和3年度の採取前後測量結果を比較して、令和3年度の採取範囲は採取前の地形に回復しているか。令和6年度の採取に必要な土砂の入手が出来るのか。
→(事務局)採取地点は埋め戻っていると考えるが、海上採取前に地形と粒度構成についてモニタリングを実施し確認のうえ判断する。現時点では、これまでの実績等を踏まえると周辺で4.5万m³の土砂は採取可能と考えている。
- ・ 海上投入は千里浜海岸の汀線維持に役立っていて、陸上投入は汀線の前進に寄与していると思われる。今後、維持浚渫土等を活用できるように、全体としての収支バランスを検討していくことが必要で、今回の資料は、その一環として貴重なデータをまとめていると思う。
→(事務局)今後も海上投入・陸上養浜を継続して実施する予定である。モニタリングによりデータが蓄積されることでメカニズム解明や土砂収支の検討が進むと考えている。

(5) 陸上採取箇所の検討 (資料 P27~32)

- ・ 金沢港の浚渫土が陸上養浜砂として使用できないとのことであるが、地盤改良などで改善できる可能性は無いのか。
→(事務局)砂としては良質な材料であるため、ふるい分けによって千里浜の養浜砂として使用することは可能であるが、現状コスト面で問題があると考えている。港湾は場所によって粒径がかなり異なるため、今後連携を図り、使用できる材料があれば活用していく方針である。
- ・ 陸上養浜材の採取場所および周辺や、砂を撒くことによる波打ち際の生物への影響を把握しておくべきである。
→(事務局)生物等に関する文献調査を実施し、必要に応じてモニタリング等について検討する。

(6) 養浜量の試算 (資料 P33~38)

- ・ 海上投入と陸上養浜は等深線変化モデルにおいて異なる扱いになっているのか。
→(事務局)海上投入と陸上養浜はモデル上、異なる扱いとなっている。
- ・ 目標達成に必要な養浜量が 110 万 m^3 /年に低減しても、これまでの実績を上回る年間養浜が必要である。実行可能性が高い対策で提案するためには、千里浜に隣接する海岸も含めた土砂収支の推定や対策の検討が必要と考えられる。
→(事務局)継続してモニタリングを進めて実態の把握に努める。
- ・ 持続可能な目標設定として、最低浜幅 35m、平均 50m の場合は今後の検討に値すると考える。引き続き、最低浜幅 35m、平均 50m の場合の維持養浜量についても検討してほしい。
→(事務局)引き続き検討を継続する。
- ・ 技術専門部会時の説明では、目標浜幅達成のために膨大な養浜が必要であり、現実的ではなかった。今回、平均浜幅 50m で計算した結果、養浜量は 5.5 万 m^3 /年、計 110 万 m^3 になったとのことだが、今後それを目標として養浜を実施するのか。
→(事務局)5.5 万 m^3 /年を目標として実施していく予定である。令和 6 年度は海上投入を約 4.5 万 m^3 、陸上養浜を約 1.0 万 m^3 予定しており、目標達成できる見込みである。
- ・ 平均海面水位の上昇は確実性が高いと言われており、千里浜のような緩勾配の海岸では平均海面水位の上昇による砂浜幅の減少量は比較的大きいと考えられる。40 年後の砂浜幅を予測するのであれば、平均海面水位の上昇を考慮すべきではないか。
→(事務局)別途検討している加越沿岸海岸保全基本計画の海面状況の結果を踏まえて、今後検討を進めていく。

(7) 海岸保全の意識向上のための取組み (ソフト施策) (資料 P39~43)

- ・ 能登の復興のためにも千里浜再生プロジェクトに防災を絡めてイベントを実行し続けていきたい。
→(事務局)今後も継続してイベントを実施していく。また、防災目的のイベントについても必要に応じて検討する。

- ・ (委員長) 小学校高学年及び中学生に対して、千里浜全体の土砂の移動・循環について学ぶ企画を考えてはどうか。千里浜に辿り着く砂粒の運命を知ることは海岸保全の取り組みの基本ではないかと考える。
→(事務局) 千里浜全体および手取川漂砂系全体の土砂動態の解明が進んだ際には、学習内容に追加していくことは可能と考える。
- ・ 環境調査とソフト施策の継続をお願いする。
→(事務局) 今後も継続してモニタリング、ソフト施策を実施していく。

(8) まとめ (資料 P44~45)

- ・ 今回、生態系と生物多様性に関する議題がなかったため、次回以降は復活もしくは議題に上らずとも、生物関係で継続してモニタリングしていることがあれば教えてほしい。
→(事務局) 海上採取、投入等による影響把握で実施している各種モニタリング結果の報告については次回より復活するようにする。